様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１４８８

研究課題名（和文）中期朝鮮語ハングル文献における原典遡源・定本確定のための方法論的研究

研究課題名（英文）A Methodological Study on Textual Criticism and Establishing an Authoritative Text of Middle Korean Hankul Materials

研究代表者
杉山　豊（SUGIYAMA, Yutaka）

京都産業大学・外国語学部・助教

研究者番号：５０７３３３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1480年代のハングル文献、『杜詩諺解』の諸異本に対して校勘を施すことにより、その定本の確定を試み、また、原典遡源の方法論を提示することを目的として始められた。
まず、現存する初刊本諸本間で校勘を行い、その範囲内での校訂テキストを作成、これに基づき、同文献の言語の有する、アクセント・イントネーション、母音調和といった音韻的な特徴、もしくは文体面での特徴を明らかにした。
一方、これまで基本的に同質の言語を反映するとされてきた同時代の文献との間には、実際には種々の言語的差異が存在することが明らかとなり、『杜詩諺解』初刊本の言語の特徴を把握する際の、新たな課題として浮上した。

研究成果の概要（英文）：This study was started in an attempt to provide a methodology for establishing the authoritative text of Twusi Eanhay -- representative Middle Korean Hankul Materials of the 1480's -- and its textual criticism.
Firstly, we developed a revised text in the range of the First Edition by proofreading among extant texts. Secondly, based on this, we conducted research on some phonological characteristics such as accent, intonation, or vowel harmony, and stylistic characteristics.
In addition, it was revealed that there are several linguistic characteristics coexisting in some contemporary materials with Twusi Enhay, and this emerged as a new perspective on for understanding the linguistic characteristics of the First Edition of Twusi-Enhay.

研究分野：朝鮮語史

キーワード：中期朝鮮語　ハングル文献　杜詩諺解　アクセント

## １．研究開始当初の背景

1480 年代の編纂、刊行に係る朝鮮語ハングル文献、『分類杜工部詩』（以下、『杜詩諺解』）の初刊本は、当時の朝鮮語の貴重な用例を数多く載せた第一級の資料の一つとして、朝鮮語史研究において重視されている。ことに、『杜詩諺解』の編纂された 15 世紀末葉は、朝鮮語のアクセント・イントネーションの面において、訓民正音創制直後のそれとは異なった性格を帯び始める、一つの画期と目されており（許雄(1955), 「旁點研究 (慶尙道 方言 聲調와의 比較)」, 『東方學志』, 第二輯, 延禧大學校 東方研究所；李崇寧(1967), 「聲調體系의 崩壞過程의 考察 ――主로 成宗時代에서 16 世紀까지의 文獻을 中心으로 하여」, 『震檀學報』, 31(李秉根 · 田光鉉 · 崔明玉 · 洪允杓 編(1988), 『李崇寧國語學選集 3 音韻篇 Ⅲ』, 民音社 再錄)；金完鎭(1973;1977), 『國語學叢書 4 中世國語聲調의 研究』, 塔出版社；門脇誠一(1985), 「中期朝鮮語の声調の特徴―特に 15 世紀末の文献を中心に―」, 『朝鮮学報』, 第 116 輯, 朝鮮学会)、全 25 巻（うち第 1・2・4 巻は伝本が知られず）という巨帙を誇る『杜詩諺解』は、その豊富な用例を提供しうる文献として極めて貴重なはずである。

しかしながら『杜詩諺解』は、その原本に用いられた料紙そのものに粗悪なものが目立ち、印出の際に活字が飛びやすく、更に現存本は天下の孤本である場合が多いにもかかわらず、その保存状態はまちまちで、汚損・破損等により、判読の困難な箇所がしばしば存在する。同文献のかかる状況は、当時のハングル文献において音の高低を表記するために用いられた傍点（声点）表記を考察対象とするアクセント・イントネーション研究において、致命的な阻礙要因となり得、その利用には細心の注意が要せられる。

本研究は、第一義的には『杜詩諺解』のかかる性格に基づいた、「信頼に足りる」テキスト確保の必要性、ひいては、中期朝鮮語諸文献における定本確定のための方法論の要請という問題意識に、その動機を発するものである。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、大きく以下の二点である。

第一に、『杜詩諺解』の諸異本に基づき、これに校勘を施すことで、『杜詩諺解』編纂者たちの目指していた、最も「あるべき」文献の姿に、可能な限り近似のテキストを導き出す。この具体的な方法については、後述する。

第二に、上述の作業を通し、中期朝鮮語文献を対象とした原点遡源、定本確定の一つのモデルを提示し、その方法論を模索する。

## ３．研究の方法

周知の通り、『杜詩諺解』には 1480 年代に乙亥字で刊行された初刊本と、1632 年に木版で刊行された重刊本の二種類が存在する。全 25 巻から成るうち、初刊本は第 1・2・4 巻の伝本が現在知られておらず、重刊本は完帙のものも含め、多数伝わっている（李浩權(2003),「杜詩諺解 重刊本의 版本과 言語에 대한 研究」, □震檀學報□, 第 95 號, 震檀學會)。重刊本では、初刊本からの内容上の改変は原則として行われていないが、その表記には約 150 年間の音韻体系の変化が反映されており、また、重刊本では傍点表記が廃止されている。

校勘作業においては、まず第一段階として、初刊本の範囲内において校勘作業を行う。具体的には、初刊本が複数点伝わる巻について、それら異本相互間の対校を行い、当時の言語事実に照らし、より正確と思われる姿を復元する。これを第一次定本と称する。報告者は、研究開始の時点までに、韓国、及び日本の諸機関に所蔵されている『杜詩諺解』初刊本の原本実査を数年にわたって行っており、その調査資料がこの段階における原料の中心をなす。

第二段階として、上述の第一次定本と重刊本とを対校することで、初・重刊本間における言語的な対応関係を法則化、更にその対応の法則を、初刊本の伝わらない巻の重刊本の言語に逆に適用することで、初刊本が有していたであろう姿の近似値を求める。

## ４．研究成果

### (1) 『杜詩諺解』初刊本校注

『杜詩諺解』のうち、初刊本が複数伝わっている巻について、それら相互間で対校を行い、現在知り得る範囲において、最善のテキストを復元した。この作業の原則は大まかに以下の通りである：

①『杜詩諺解』初刊本には、印出後に誤字を切り抜いて、正しい字の活字を捺した紙を裏から貼り付けるなどして訂正を施した「校正本」と、そうでない「非校正本」が存在する。「校正本」と「非校正本」との間に異同の存する場合、原則として、「校正本」に従った。

②字画、傍点の有無の異同については、原則として「無」よりも「有」、「少」よりも「多」に従った。しかしながら、その原則に従った結果が当時の言語事実に合わない場合は、その旨、注記した（後述)。

③「非校正本」のみ複数伝わる巻において異同が見られた場合は、重刊本により近いものに従った。

以上の過程で得られたテキストが、前項で述べた「第一次定本」に当たるわけであるが、この後の研究成果は、いずれもこの校訂テキストの電子データに基づいて出されたものである。

なお、この校勘内容は、全て校注の形でまとめられており、復元した箇所については、その一々に対し、『杜詩諺解』初刊本、もし

くは同時代の他の文献から例証を引いている。この校注は、今後、補完して公開するべく準備を進めている。

また最近では、16 世紀末葉に『杜詩諺解』初刊本の諺解文を筆写したと思しい『月川杜詩』が学界に紹介され注目を集めているが（박진호(2018)，「『月川 杜詩』 소개」，국어사학회 월례강독회(2018年 3月 17日，於동국대학교 법학/만해관 2층 260호 강의실）發表文)、同文献へ検討を加えることにより、報告者の今後の研究にも、新たな展開が齎されることと期待される。

(2) 『杜詩諺解』初刊本におけるアクセント・イントネーションの特徴による文献内的区分

『杜詩諺解』初刊本の諺解文において、傍点（上述）表記により伺うことのできるアクセント・イントネーション関連諸現象の特徴が、同文献内部において部分により種々に異なりを見せることを示した。

具体的には、巻 3 の第 59 頁以前においては、先行研究において 15 世紀末葉の言語の特徴とされる、所謂「語末平声化」がほとんど起らず、15 世紀中葉の言語に近い特徴を示すが（この事実自体は、杉山豐(2013a)，「『杜詩諺解』 初刊本 卷3의 몇 가지의 言語的 特徵 ―文獻 內部에서의 言語的 區分에 注目하여―」，第 235 回 朝鮮語研究會 發表文(2013 年 2 月 23 日，於東京外國語大學本鄕サテライト)の段階ですでに明らかになっていた)、同時に、「連体形語尾+繋辞（もしくは連体形語尾+形式名詞+繋辞）」構成に由来するとされる語尾を取る語形にも、該構成が本来有していたであろう、アクセント単位の境界がよく反映されているなど、総じて保守的な様相を示す。しかし、巻 5・6（・7）においては 15 世紀末葉的特徴が顕著となり、それ以外の部分ではその程度が更に強まる。それと同時に、上述のような特定の語形においても、過去のアクセント単位の境界の痕跡は希薄となる。

(3) 『杜詩諺解』初刊本における母音調和の特徴による文献内的区分

『杜詩諺解』初刊本諺解文に現れる体言曲用形の用例における母音調和の特徴について論じた。先行研究でもすでに指摘されている通り（한영균(1994)，「후기 중세국어의 모음조화 연구」，서울大學校 大學院 國語國文學科 博士學位論文)、固有語の曲用形では助詞の異形態選択において、概ね母音調和がよく守られる一方、漢字語の場合には母音調和の例外が増加する。ところがこの「例外」は、文献全体を通して同一の割合で見られるわけではなく、「例外」の起こる方向性という点で、部分によりはっきりと異なった特徴を示す。特に、巻 3 においては、体言語末音節に含まれる母音の種類に関わらず、助詞の異形態選択では陽性母音形を好むという、いわば「陽性指向性」がはっきりと認められた。

以上の(2)、(3)の研究結果は、『杜詩諺解』初刊本の朝鮮語が、決して均一のものではなく、様々な特徴を有する複数の変種が混在していることを示している。このことは、初刊本の伝わらない巻の諺解文の、初刊本における姿を復元する際、そこに載せられていた言語が、どのような特徴を有する変種であったのか、見極める必要があることを意味する。特に重刊本から覗うことのできない、傍点によるアクセント・イントネーションの表記を復元する際に重要な問題となる。例えば、分節的要素における特徴と、アクセント・イントネーションという非文節的な要素における特徴が、その分布の区分を同じくする、といった事実が存在するならば、重刊本における分節音の特徴から、かなりの信憑性をもって初刊本の非分節音の姿を復元することが可能になると思われる。この点については、今後もなお引き続き糺明すべき課題である。

(4) 『杜詩諺解』注釈文の文体の性格

『杜詩諺解』の注釈文には、大きく分けて所謂「懸吐漢文」的色彩の濃厚な文体（「懸吐体」）と、より「自然な」朝鮮語文から成る文体（「諺解体」）の 2 種類の文体が確認される。しかし、これら 2 種類の文体は、相互に截然と区別できるものではなく、その境界部分はゆるやかな連続体を成している。のみならず、これら 2 種類の文体は、一つの文の中において、比較的自由にスイッチングしつつ混在している。また、「懸吐体」の文から「懸吐」を削除したとき、漢文（古典中国語）としては非文法的な文となる例も散見される。このような注釈文の文体についての考察を通して報告者は、『杜詩諺解』編纂者の認識において、「懸吐体」まで含めて注釈文全体が「諺語」と捉えられていたものと結論づけた。

興味深い点として、初め「懸吐体」で書かれていたものが、校正（上述）の過程で「諺解体」に改められている箇所が存在することが挙げられる。『杜詩諺解』初刊本における校正の結果は、重刊本に反映されていることが知られている（李浩權(2003)前掲論文)。初・重刊本間における注釈文の対校を通し、『杜詩諺解』編纂者がいかなる条件の場合に、いかなる文体が「ふさわしい」と看做していたのか、今後、考察を深めてゆくべき課題と言えよう。

(5) 1480 年代ハングル文献の言語的変種

上述の通り、先行諸研究においては、『杜詩諺解』初刊本を含めた 1480 年代の文献の言語は、例えばアクセント・イントネーションに関わる特徴においても、訓民正音創制直後のそれと区別される、一つの画期と目されてきたが、裏を返すならば、この時代の文献の言語は基本的に同質であるという前提で

論じられてきたと言える。本研究は『杜詩諺解』初刊本の「あるべき姿」を求めることを目的として初められたが、そのためには、当然のこととして同文献の言語の特徴を把握している必要がある。そうしてその特徴というものは、『杜詩諺解』への内部的考察を通した観察により把握され得るものがある一方、同時代の他の文献との対比を経ることで明らかになる部分もあるであろう。

報告者は、本研究期間の後半、これまで『杜詩諺解』初刊本と併せて 1480 年代の言語の特徴を見せるものとして論じられてきた『金剛経三家解』、『永嘉大師証道歌南明泉禅師継頌（南明集）』諺解等、同時代の諸文献の言語に対し、それまでに『杜詩諺解』初刊本について明らかにしてきたいくつかの言語的側面から同様の検討を試みた。その結果、確かに先行研究で指摘されてきた通り、例えば「語末平声化」が活潑に起こるなど、共通した特徴が認められる一方、特定の文法形式結合形における、過去に存在したアクセント単位の境界の反映有無、もしくは母音調和の遵守の傾向等、様々な部分でそれぞれに異なる特徴を有している事実が確認された。

この問題については、今なお調査、検討中ではあるが、『杜詩諺解』初刊本という文献の言語の有する特徴を捉え直す意味でも、今後研究を進め、結果を世に問うてゆく計画である。

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①杉山 豐[스기야마 유타카](2018)，「『杜詩諺解』 注釋文의 文體에 對하여 —‘懸吐體’와 ‘諺語’—」，『한국문화』，81，pp. 35-59，서울대학교 규장각 한국학연구원（査読有り）．

〔学会発表〕（計 3 件）

①杉山 豐[스기야마 유타카]，「『杜詩諺解』 注釋文의 文體에 對하여 —‘懸吐體’와 ‘諺語’—」，2017 年 韓國經學學會 國際學術大會 —經學史의 시야에서 바라본 小學類 문헌 -규장각 소장 字書·韻書·諺解書·譯學書를 중심으로，2017/12/01 ~ 02，於 서울大學校 奎章閣韓國學研究院 1 層會議室，ソウル（大韓民国）．

②杉山 豐[스기야마 유타카]，「《杜詩諺解》 初刊本에서 觀察되는 韓國語 母音調和와 關聯된 一側面 —體言 曲用을 對象으로—」，우리어문학회 2017 年 夏季 學術大會，2017/08/25，於 建國大學校 서울캠퍼스，ソウル（大韓民国）．

③杉山 豐[스기야마 유타카]，「『杜詩諺解』 初刊本에서 發見되는 聲調 關聯 現象에 對하여 —文獻內에 共存하는 變種에 對한 觀察을 通하여—」，第 2 回 「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」共同利用・共同研究課題研究會，2017/03/18，於 東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所，東京．

## ６．研究組織
(1)研究代表者

杉山 豊（SUGIYAMA，Yutaka）
京都産業大学・外国語学部・助教
研究者番号：50733375